

格闘娘はお年頃

Fighting woman is excited



威風堂 2021

Fighting woman is excited



●まえがき●

・こんにちは。威風堂です。今回はたまつやだ先生とじゃっじ先生によるイラスト&ストーリー本になります。

近年は格闘ゲームの新作リリースされておりますが、30代～50代の自分たちにはついていけず、キャラを動かして愛でるだけで精一杯です。そんな昭和男達の思い。どうぞお楽しみください♪

(中野ら～めん)

たまつやだ：表紙・P03～P14

じゃっじ：P02・P15～P19 / 中野ら～めん：テキスト&編集



『神月かりんが組み伏され
噴乳しながら屈服する』

TXT:中野ら〜めん

IIS:たまつやだ

（ふふ……この神月かりんがなんて無様な格好に……あまりの羞恥に顔から火が出そうですわ……）
私はエジプトの大富豪にまんまと乗せられ、ストリップ・デスマッチに参加する事となった。賞品は私自身の身体で……
（まったく悪趣味な趣向もあったものだわ）
相手が男性だったとはいえ、敗北してしまった私は裸よりも恥ずかしいスーツを着せられ下卑た笑いを並べる観客席をゆっくりと歩かされる。

「三百ドル出そう」「俺なら五百ドルだ！」

お金に糸目をつけずこの身体を値踏みする成金たちの声。

（私の痴態を見るためにを競売に掛けようなんて）

普段は目にも止めない初老の中年達が身をむいてくる。

（まったく、負けたとはいえなんて屈辱……）

敗北者は勝者の奉仕をする。だがその勝者はとてもSEXが出来る

状態ではない。私の手で手足は大きく破壊した。ですが殿方のがむしやらという闘争心に私は敗北したのだ。だからその権利が競売に

掛けられる。私には自由は無い。

「一千万ドルだ。決まったな。俺が相手だ。」

目の前に立った男は中年だが筋肉質であり、体系は整った若者であった。恐らく他の試合でのファイターであるう。私はその身体に視線を向ける。

「あら……なかなかの殿方、それにもういきり立って……」

「ふふふ……お相手いたしますわ

」



「さあ、はじめましょうか♡」
うぶっーじゆるるゅっ♡

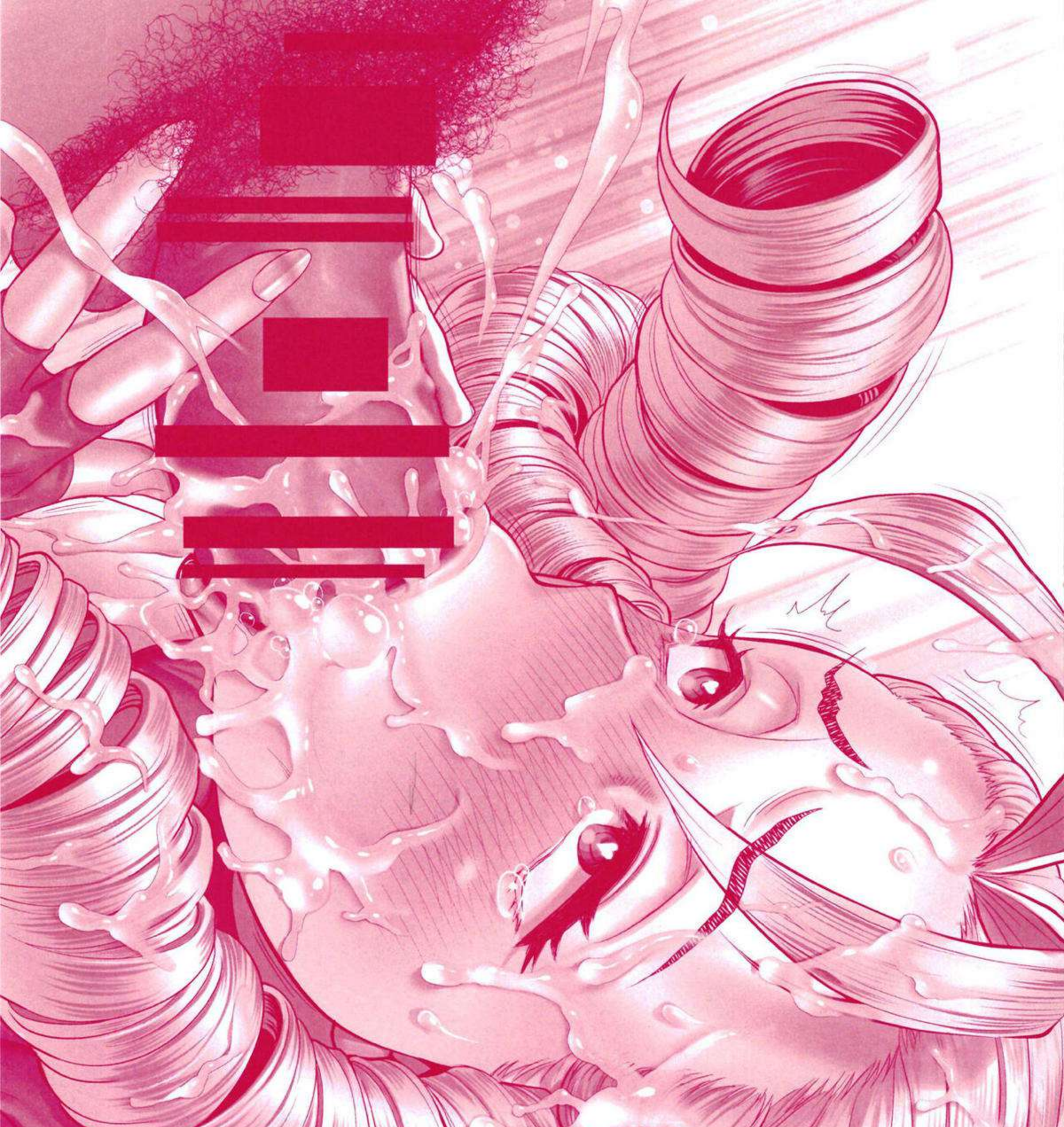
私は男の前に屈み、挨拶もそこそこに即良を始める。そんな行動を取ったのは、この饗宴をさっさと終わらせたいからだ。早々にヌイてしまえば、私は自由の身。この男が満足してしまえば良いのだと私はその考えを実行した。しかし……男の陰茎を啜えて初めて違和感に気づく……

（く、臭い……この男……お風呂に入っていないの……♡）

「ああ、気づいたようだなお嬢様……さっき一試合終えたばかりだ。本当はお前さんと一戦やりたかったんだが、ウエイト差がありすぎて成立しなかったんでな！」
「うぶっーわ、私の相手をですってえ……！」

「今夜のフアイトマネーは全部あなたに突っ込んだ！せいぜい楽しもうせえよお嬢様」
そう言って男は私の頭を掴み、無理矢理にフェラチオを続けさせる。

「おぶっ♡ぶっ♡うぶぶぶぶ♡」
優先権を取られフェラチオはイラマチオに変化していく
「お、お静かになっ♡て♡こんなのは本意じゃありませんのよ……」
そう言いながらも私の指は自分の恥部へと手の延ばす。私自身もこの状況を愉しみ始めていた……
（何故かしら……この殿方の匂い……とても惹かれてしまっ♡♡）
令嬢といえど既に純潔ではない。一晩限りの遊びを繰り返した私でもこの不適な男に新しい快樂が芽生え始めていた。
（き……キモチ♡イイ……♡♡）



ぐっうぶぶっほあっ……じゅっじゅぶっ♡ぶががはあっ♡♡
男の手に抵抗し、自分でイニシアチブを取りフェラチオを続ける（ああっ何て香りなの♡♡とても臭いわ♡♡）
回内に唾液と汗と、男の恥垢が混ざり、酸味と塩味が喉をつたる。（少々……いえ、なんて不潔でっ♡♡なんて粘りつく♡♡私の口にはとても合いませんわっ♡♡）
「すげえフェラだ。とてもお嬢さまとは思えないぜ！今のお前は一級の娼婦だ。かりんお嬢さま♪」
（なっ！こんな屈辱……♡お、覚えてらっしやい……♡）
下卑た煽りが私を動揺させる。でもこれは相手のペースを奪う一流ファイターの心理テクニク。その手は喰わない、私はそう分析し、ペースを保とうとする。だが男はもう私の手の内を察し、私の首筋や乳首など、見えない部分を責め立てる。なんて男……いつそこの淫茎を咬みついてやるうかしら！その考えすら先読みをされていたのか、男は私の回内に思いつきり射精をし始めた
「ぶぶっ♡げえはっ♡ぶへえええっ……♡♡」
喉の奥にまで注入される精液。男は頭を動かさせない。徹底的に精液を飲ませる
「ぶあっ♡♡あああっ……♡♡ひぶうっ……♡♡うおえええっ♡♡……♡♡に、誓いですわ！」
「そうはさせねえよお嬢さま♪とりあえずの一発だ！まだまだ愉しもうぜ！」
男は私の体を持ち上げ、ベットへと導いた。



ベッドの上でやにわに身体を転がされ、男はそのイチモツで一気に貫く

「あっ♡あっあー！うっこんな……身動きがあっ♡」

男の激しい腰使いに私はその動きに翻弄される。

「おおっスゲェ絡みつく……それになんて熱さだっ♡」

「気持ちいいぜ♡お嬢様の名器は一級品だっ♡」

「くっ♡こんな格好♡……少しは節度を持ってくださいましっ♡」

「その強気な態度もますますそそられるぜえ？」

そう言って男は私の陰毛をフチフチとむしり始める。

「ひっ！はいんっ♡乱暴なさらないでっ♡♡」

私の焦る姿を見て愉しんでいる。なんて男なのっ！上半身を起こしその行動を止めようとするが、男はそれを察し、挿入をしながら腰を持ち上げ、私の体制をキープさせる。

（くっっ身動きが取れないっ！）そのまま男は腰を動かさし、挿入を深める。

「あっ♡あっ♡あおっ！♡」

「あおおお！背しいっ♡……でもっ♡♡♡」

「いいぜえお嬢様。もっただもっど愉しませる！」

男の罵りに心を曇らせながら、私の体はより熱く、身体にも力が漲ってしまふ。

（ああっなんて快楽っ！でも何て屈辱！この無様なダンスを私は受け入れてしまっている。）

「ひゃあおお！ふ、深いわ……でもっ……あああっ♡♡♡」



「ほれほれっ！この体制なら一層深く感じるたるお？」
「そう言って男は寝そべり私を騎乗位に誘う。」

「ふんっ♡良い乗り心地よ！」
私はそう強がったが突き上げる快感をもう我慢する事は出来ず、跨った瞬間から腰を上下に動かし続けてしまふ。

そのロデオシーンを見て男は更に興奮する。

「おおおっ！流石お嬢様だ！荒馬を見事に乗りこなしている！」

「ふんんっ当り前ですわっ♡♡でも貴方のエスコートも♡♡犬変お上手ですわっ♡♡」

男が悦ぶ姿に興奮した私は自然と指先で乳首を触りだす。二指で刺激し、自らの乳首のしこりをほぐすと、乳頭から母乳が染み出してしまった。その姿を見て男の動きは一層激しくなる。

「こりやすげえ。お嬢様の母乳噴射だあ！」

「せっ……はっ……はぁあん♡」
「ううっ♡♡はあん♡♡もっとお奥までえエンっ♡♡」

（ほ、母乳が出てしまいましたわっでもっ気持ちいいっ）

「おおっおおおっ！何て淫らな姿なんだかりんお嬢様！」

「うっうおおおっ♡♡ヒッひいいーん♡♡」

私は大きくのけぞり牝馬のごとく嘶き、その殿方の腹上に欲喜の飛沫を盛大にぶちまけている。

「はぁぁぁぁぁ……最高♡」

後で聞いた話だがこの痴態は動画として全世界に同時中継され、神月の口座には莫大な配信ロイヤリティが入っていた。(END)



- 『KOF14』 がようやく馴れてきた頃ですが、来年には『KOF15』 が出るとの事で戸惑っています。調べたら 14 って 2016 年のゲームなんですね……。
- でも新たなストーリーやら新キャラも楽しみです。でもマチュアもバイスも居なくて悲しい……。丁度 PS では 15 のオープンβもやっており、新キャラも触れるのですが、話題ののクローネンさん強いですねえ。正式発売を楽しみにしています。



たまつやだ!!

『テリー・ボガード(女性化)』

の満たされな^{ない}性欲』



TXT:中野ら〜めん
ILS:たまつやだ

俺の前に見慣れない女性が一人で立っている。彼女は俺を見るなり「いったいでめえはなにモンだーっ!」

と叫び、その後親しげに話しかけてきた。

「なーんてな。久しぶりだなあ。

テリー・ボガードだよ!」

テリー・ボガードと言えは米国では名の知れた格闘家だ。

自分も何度かファイトをしたことはあるが、間違いなくテリーは男であったが……

「ああこの格好の事か?ちよっとククリの奴のせいで女性にされちまったんだよ。」

女性らしい身体つきを惜しげもなく見せつけてくるテリー

特に股間なんてジーンズが破れ、

オ●ンコは露出してている

まるで俺に向かって挑発をしているようだが……

「だが俺はこの格好でもイケてるだろ?」

「なんだか身体もアツくなっちゃまってよおハラが減って仕方がねエぜ!」

「よおーし!いっちょここで1発ヌキバトルしてやろうかあ!」

「久しぶりのSEXファイトだから力が余ってたんだ。多少のケガは覚悟しろよ!」

「なっかな……何て事を言い出すんだ……」

照れながら拒否をする俺の腕を払いのしかかってくるテリー

その目は完全に野性の狼そのものであった。

「いいから!さっさとチンコ出せよ!Are You Ready?」

餓えた狼が牙をむいてきた。



「女になっからといふものなあ、腹が減って仕方がねえぜ!」

「WOW♥んっ!♥じゅっ♡♡♡」

「ほおっ!♥じゅっ♡♡♡ほほっ♡♡♡」

テリーは俺のスポンを脱がすなり

強烈なバキユームヲエヲ始める

「んんっ♡じゅっ♡♡♡Hoyルー

キー♥イイモノを持つてるじゃね

えか!」

「カリ太で啜え甲斐あるぜ♡」

まるで極上の獲物を目の前にした

ような眼光を漂わせ、獣のような

振る舞いでテリーは執拗に喰らい

付けてくる。

口淫による唾液まみれになった俺

の陰茎を舌先で舐め上げ

「はああっ!♥まったく、この俺

がこんなイチモツを見逃していた

とはなあっ♡♡♡」

今までは男の中の男として生きて

きた『伝説の狼』だが、今は口を

尖らせた雌のアルマツロのように

一心不乱に俺のカウパー液を夢中

で吸い上げる。その音はまるで台

風のようだ。

「びゅっ♡じゅっ♡♡♡うっ♡♡♡」

「じゅるっ♡ずずずじゅりゅらう

うっ♡♡♡」

吸い上げる回の中では俺の鈴舌を

舌先が彫り開けていく……もう我

慢の限界だ……

射精感を限界まで上げたところで

テリーは動きを一旦停止させ、お

もむろにスポンを下るしてまたが

ってくる……

「さああ♥♥……いよいよここか

らが本番だぜ?」

Comen♥Get♥Serri

ous♥♥♥」

もはや痴女だが馴染みの台詞だけ

がテリーの体裁を保っていた。



「俺の中にいる狼を起こしちゃまったようだな。悪く思うなよ!」
ずちゅっぐちゅっと卑猥な音を立てて狼の淫口は俺の一物を飲み込んでいく

「うっお——っ♡♡♡♡」
テリーの膣内はとも熱く、肉感弾かせながら大きなうねりて俺を射精へと誘っていく。

狼の荒い吐息が俺の鼻孔を膨らませ、自分のペースで腰を動かす。

「あっああっ♡♡♡♡イイぜ凄く……奥までエエツ……♡♡♡♡」

テリーの乳房も弾け、上下左右振り子のように激しく暴れ踊る。俺の腰の動きはもう止まらない、腕は暴れる身体を押さえつけ、テリーの身体を完全に組み伏せチンコを押しつける。頭の中はもう無茶苦茶だ、だがテリーの震えが俺の動きに合わせながら悶え混ざってくれる。最高だ……どんなフアイトでもこの快感は味わえない……

「うっ……♡♡♡♡もう、だめっ♡♡♡♡だめだめだめっ♡♡♡♡」

「こんなっ♡……あっ♡♡♡♡あああっ♡♡♡♡んんんんっ♡♡♡♡」
「うおおおおおうううー♡♡♡♡あ——」

「さげんなあああっ♡♡♡♡」
まるで狼のような咆哮を上げ、テリーは全身を震わせる

「イクっ♡♡♡♡イッチまう……最高にハジケちまいそうだあああーっ♡♡♡♡」

「うああああーっ♡♡♡♡ああっぴやああああっ♡♡♡♡」
大きく背をのけぞらせ、テリーは雄叫びと共に激的な快感に身を震わせてイッてしまった。膣内にははまだ挿入したままだが、精液と愛液がドクドクと染み出していた。



テリーの股間に溢れた精液がヨボヨボと音を立てながら漏れ滴る。ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……と、とめどなく染み出る様子を俺は満足気に見ていた。

「おうう……♡♡OKエエイ♡今の最高にイイカンシだった……♡また染しもうせ♡」

こうなっってはもはや飼いやられ猫のようで、その様を回に出せうとしたが、そこにテリーは嘔く「なめんじゃねえよお……♡おれはまだ狼のまま♡だ……せえ♡」気丈な台詞で強がってはいるが、その身体は快感に打ち震え、心地よさそうに吐息を放っている。なんてヤツだ。でも俺は「このまま女の身体のまま生きていくつもりか？」と聞くと

「男とか女とかあ……♡精神論とか堅い考えじゃ先はないぜ♡」

「限界ってのは突然くるもんだ……次にヤル時にはもっと強くなってるよ♡俺もまだまだだしな♡」伝説の狼は自濁に濡れながら強がっている。股間もまた大洪水だ。その様子はとても愛おしく……何度も腰を合わせたくなる……またやるうせ……

「まだ萎えちやいないだろ？オレの中の狼は、まだまだ暴れたりないぜええ♡♡」

「一息ついたらリターンマッチだ♡今夜はとことんまで……♡付き合ってもらうう……せえ♡♡」

そう言いながらもテリーは静かに眠りについた……もはや体力の限界だろう。

自分に自信が付いた俺はまたこの狼を狩りに来るであろう……きつと……明日もまた……(END)



SNK ヒロインズ LIT

☆ヒロキタクトツツヨリ
全然イケます
EDED2"良"
デ"サ"2"2"2"2"2"
EDもし"たり"作"2"
あ、2 M
SNK 愛
あふれる
作品す

by ぴんち









来年もまたゲーセンでお会いしましょう



・格闘娘はお年頃・

発行日：2021年12月30日（C99）

発行：威風堂

印刷：JC2 TAIYAKI

mail：nakanorarmen@hotmail.com

・注意書き・

本書でのデジタルコピーを含む無断転載・複製・複写を禁止いたします。

上述の行為を発見舌際には速やかに法的処理を致します。

またネットオークション、フリマへの出品はご遠慮ください。

威風堂 2021

Fighting woman is excited

Nakano Rarmen



Judge

Tamatsuyada